



南仏・アルル および近郊、 色の旅

地中海に面する南フランス、コート・ダジュール一帯を色で形容するとどうだろうか？コート・ダジュールとは「紺碧海岸」の意味だが、それは地中海の色を形容している。大陸の方に目をやると、真っ白い岩肌がごつごつと露わな山岳地帯、なだらかな丘陵地帯は、子細に眺めれば、小さな石がゴロゴロとしてはいるが、牧草が生い茂り、牛馬羊の群を眺めることができる。ここは深緑という形容がふさわしい。そして密集する住宅地は屋根も漆喰塗りの壁も濃い赤を敷きつめたようだ（今日では壁は白塗りに変えられつつある）。紺碧からは太平、深緑からは悠然、白からは気品、濃赤からは情熱を感じ取ることができる。それぞれは、あくまでもぼくの、美の感性イメージでしかない。事實は、地中海はさまざまな武力的進出の絶好の航路として利用され続けてきたし、広大な深緑では、さぞかし農民たちは、その開拓に、多大な犠牲を払ったことだろう。巨大な白岩は出水の湧く小高い山頂に築かれる、あるいは平地の巨大な城の建築素材とされた。白は、確かに、ヨーロッパ全体における富と権力と榮譽とを象徴する色ではある。しかし、城の建築にはどれほどの奴隷、犯罪人、近辺の農民が牛馬以下の扱いを受け、血を流し命を落としたことだろう。白を保有しない、することを許されない人々は、白い小石を混ぜ込んだ、この地方に特徴的な鉄分を多く含んだ土砂を用いて壁の素材とし、また屋根瓦を作った。それ以外にも、顔料として、人々の美の演出に貢献し続けた。人々の、生きる知恵と心意気が、赤の色には込められている。

2月中旬の、ようやく水温む若芽時、早春のヴァカンスに、内陸部から「紺碧海岸」ニースに太陽を求めて多くの人を訪れる。気の早い若者が真っ裸で波間を泳ぐ姿もちらほら。

ミモザの真っ黄色の花房が山里にも揺らめきはじめた。まさに春到来のニース近郊のヴォンス市から、畏友梶原圭子さんの運転する車で、アルル市へと向かう。高速道をひた走る車窓を、地中海、工場地帯、牛馬羊の放牧場、厳しい岩肌の山岳地帯、一帯に広がるブドウ畑が、次々と飛び去っていく。まるで、フランスのすべての光景を一瞬にして味わっているような気分になって、至高の一時を過ごしていた。

やがて車は、南フランス地方都市特有の、狭く入り組んだところに入っていく。車から降りて街中を歩く。旧アルル市内に入った。レストラン・カフェが路上に張り出され、人々は、一時も陽の恩恵を逃がすまいとしているかのごとく、ゆったりとくつろいでいる。

ウインドウ・ショッピングの苦手なぼくは、足下の整然とならんだ石畳の、一つひとつの変化を視覚で味わっていた。かなり歴史を感じるそれらは、直感が正しいとすれば、一つひとつが石工の手によって形作られたもの。おおよその形は同型であっても、一つひとつの穿ちの痕は、それぞれが異なっている。じつに個性的である。石の表面の穿ちは雨が降っても溜まることなく、雨水の跳ね返しが緩和され、分散されることによって、足下の濡れがさほどひどくはならない。巧妙なる知恵が石工の技の中に潜んでいる。

昨今の大都市に作られる模造石による、ぎっしりと敷き詰められた石の道は、こうした工夫などはなれておらず、雨が降れば、水の膜ができ、あたかも油を一面に撒いたようにツルツルの鏡状となり、雨足はそのままの角度で高く跳ね上がる。機械による大量生産。機械工業が盛んになることを「先進性」と文明史観では教わるが、そのことによって、手作りの中に込められた創意工夫・知恵技術、そして個性は消滅していくことになる。文化史観から見れば「先進性」とは人間性の退化に他ならないと、一つひとつの石を見ていると、考えざるを得ない。もちろん「先進性」とは過酷な労働の解放にもつながっていく側面もあるわけであるから、必ずしもとがめられるべきことではない。しかしながら、間違いなく、石工という高度な専門技術工は歴史の彼方に追いやられ、四角四面の石畳が機械によって大量生産される現実を生み出す。足下の味気ない光景に出会うと、ぼくは、まったくその場にいるきっかけを失ってしまうことになるのだ。

アルルの街すべてが石工の手作りであるならばそれに超したことはないが、残念ながら、それは一介の通りすがりの者の感傷のなせること。そこに住む人々は、その人々の生活性によって、街を作り替えていく、それが街というものの宿命なのだ。

ローヌ河の川岸に立つ。ローヌ河は地中海からアルルを通りリヨンへと遡る水路を持つ。リヨンもそうだが、その途中にいくつもの都市がこの川の恩恵を受けて発展した。アルルもその一つ、ローヌ河を利用した水上交通によって発展してきた街だ。水上交通というからには、ありとあらゆるものを運び込み、また運び出していったということになる。陸上運輸の人馬を動力源とするのはスピードはあるけれども一度に運ぶには、きわめて多数の人馬・装具が必要となる。暇はかからないけれども手間は莫大なものとなる。とくに兵士・武器・弾薬それに築城のための石塊などの、大量かつ重量のあるものを運ぶには陸上運輸に頼るよりも、水上運輸の方が利便性が高いわけである。19世紀の初めまでは水上運輸が非常に活発に利用されていた。もちろん地中海交易のための商業船も行き交っている。闘いや商業などのために水上の船にいる間、人々は、何を考え、どうしていたのだろうか。船底でオールを漕ぐ奴隷や叛乱などによる重罪人はひたすら、監督者の鞭を恐れ、一糸乱れぬオール漕ぎに汗みどろ、自己の運命を呪ったのか、それとも天与の定めと悟っていたのか。船倉の武器・弾薬・築城の石・商いの品々の点検と整備に携わっていた人々も、おそらくは、半奴隷や重罪につぐ犯罪者。叛乱の恐れなしとみなされた人々であろう。これらの人々にとって見える「光景」は、松明やローソク、船窓から漏れ入る外部光にか

すかに照らし出される、過酷な労働で黒ずんだ色をした他者の肌と船倉を組み立てている木の肌の色。いずれにしても彼らには、プロヴァンスのさまざまな色とは無縁であった。甲板に上がることができたものは、もちろん闘いの戦略を練ったり勝利を祝ったり、商いの出来不出来について考えを及ぼしているだろうが、ゆったりと過ぎゆくプロヴァンスの四季折々の自然をたっぴりと味わっていたに違いない。

白昼は白くまばゆく太陽に映える、岩肌も露わな山々、夕刻にはそれらの岩肌が赤く映え、次第に青ずみ、そして天空と一体化して黒い巨大な影と変わる。神秘的なまでに自然の醸し出す色のハーモニーが、こうして多くの人々の心に残り、旅の土産話として語られ、そして語り継がれる。現代に生きるぼくたちにも、それを絵画という芸術形象で確かめることができる喜びがある。たとえば、セザンヌが描いた山岳の絵を挙げるができるのだ。

ことのついでの話だが、現代の画家の一人カイコ・モティは「太陽を掴んだ画家」と呼ばれる。彼について確かな資料を得ていないのでこの場で書くことにはためられるが、しかし、彼のリトグラフを見ていると、ぼくなどはまさに彼は、南フランス地方と共通する「太陽」を描ききっているように思われる。カイコ・モティの構図を意識して、アルル近郊で、林間に沈みゆく夕陽をカメラで「掴んで」見た。カイコ・モティにはとうてい及ばないけれども、南フランスの太陽は「掴んで」みるに値する神秘性を持っている。空間一杯に黄金色が広がる彩色光景は生まれてこの方味わったことがない。



もっとも、もし、船底で鞭におびえ、オールを日がな漕ぎ続けた男たちが、この落日を見ることができたとしたら、船底などにもぐった経験のないぼくたちと同じ感慨を得たかどうか。日本の絞りに搾り取られたごくごく零細百姓が夕陽の色を見て、「夕陽の赤さはオラたちが血の色」と語っている記録を読んだことがあることをふと思い出した。

目前を、たっぴりと水をたたえ、悠々と流れているローヌ河の河面を見つめていて、はるか彼方の昔人のあれこれを考えていた。



梶原さんに促されて、少しばかり河に沿って歩く。河のこちら側が旧アルルとなる。土手に沿った道路を隔てて、白い石積みの、しかし歴史の重さを感じさせる建築物がある。「瀬田さんのお好きなものですよ。」とにこやかな笑みを浮かべて、ガイドをしてくださった。さて、ぼくの好きなもの、とは？ ぼくはきわめて怠け者で、事前にガイドブックなどで、訪問先のことを調べることはまずない。そ

の上、梶原さんから、事前に概略的なことを伺ってはいたが、実物を目の前にし、お話を伺ってはじめて、事前に伺っていたことと結びつく、という頭の回転の悪さである。とはいうものの、朽ちて崩れ落ちている姿そのものを露わにしている石造りと言えば、中世以前のものであることは確かである。もちろん全容に対してではないけれども、何の囲い保存もせず手に触って確かめることができる歴史遺産の、積み上げてある石の一つひとつの大きさ、雨露で穿かれている様などを目で追ってみる。

「紀元 1 世紀頃のローマ帝国の遺跡だそうです。ここは浴場跡です。」梶原さんのガイドで頭の中が鮮明になった。コート・ダジュールにせよプロヴァンスにせよ、数世紀にわたるローマ帝国の遺跡が広大に広がり、幾重にも重なり、眠っている。共同浴場跡といえばニースのマチス美術館側の遺跡は、ローマ貴族の保養地としてかなり長期、数百年間栄えたところで、ゆったりと歴史散策できる絶好の場所である。アルルのそれはニースほどには大きくない。ここはおよそ紀元 4 世紀まで使われていたようで、毎日、午後になると、人々が湯に浸かった。もちろん湯は温泉ではなく、薪をくべて沸かした。

ローマ帝国時代の都市生活とは切り離すことのできない建築物、共同浴場は、パステウル(公共のトレーニング室)で繰り広げられた運動のために体を守るための入浴と結びついていた。つまり、今日のスポーツ・トレーニングのはしりと考えていいわけで、乾いたところで大量の汗をかいたのを確かめると熱いお湯や冷たい水に浸かることを繰り返す、サウナのようなものである。ローマ貴族や上流市民にとって格闘技や武器を持って戦うことはきわめて大切な教養であったから、毎日のトレーニングは欠かせないものであった。もちろん、自らが戦うばかりではなく、奴隷同士を戦わせその勝敗の賭けを争うのも彼らのたしなみの一つであった。女性も、いや男性よりも先に女性が、共同浴場に入ったというから、女性にとっては美容のためであったのだろうか。ぼくのささやかな歴史知識では女性がスポーツとしての各種闘争をした、というのはインプットされていないから。

彼らは、石積みのさまざまな建築物と同じ色、すなわちまばゆいばかりの白の衣を身につけて、街を歩き、生活をしていたはずである。古代スポーツの観衆たちもまた、スタジアムを白一色に飾っていたことだろう。(女性は黒衣を……)



アルルは、夏になると闘牛見物のため、人々があふれる。「牛は暑いのであまり闘争意欲がないですよ。」とは梶原さん。灼熱の太陽を浴びながらでは牛ならずとも闘争意欲が湧いてこないだろうなどと考えるのは実際の光景を目にしたことのない者のたわごとである。昼食のために入ったレストランの壁面には、ここ数年間にわたる闘牛のモチーフ絵が飾られ、闘牛熱が盛ん

であることを教えられた。レストランのマダムは、生死をかけた激しい闘いとは対極にあるような、優しくて楚々とした人柄とお見受けした。きっとこの地方の人々は、内面に激しい情熱を込め、日々の暮らしを送っているのだろう。それはあたかも、街の作り全体が、ローマ帝国史跡を除けば、深赤から成り立っているのを、いつしか心の内にもしみこませたかのようなのである。



さて、この恒例の闘牛の会場は、ローマ帝国時代の円形闘技場がそのまま使用されている。(もちろん、今日使用しているのは、改修・整備の結果であり、文字通りの「そのまま」というわけではない。19世紀半ばの写真では、外形は保たれてはいるものの、スタジアムのほとんどが崩れている。)パリにもニースにも円形闘技場跡がある。ぼくが知らないだけであり、おそらくローマ帝国が栄えた時期、貴族や上流市民の教養とたしなみとして必要不可欠だった、生死をかけた古代スポーツのための施設は、いたるところに建設されたのだろう。それらが、史跡保存・保護のためという名目でぼくたちにとって心理的には遠く離れた存在となっているのではなく、何らかの形で市民につねにオープンされているところに、2000年の歳月を空間的に共有する得も言われぬ喜びを覚えるのである。ローマ帝国が滅び、いろいろな文化、さまざまな生活がこの地に移ってこようとも、円形闘技場の外壁は、白くまばゆい輝きを失せることなく、人々に多くの楽しみを与え続けてきた。

そして今、ぼくは、その歴史総体がしみこんでいるスタンドの一角に佇み、足裏の石の感触

を味わっている。石壁の一つに触っている。いたずらに感傷に耽るわけではないけれども、人々の血や汗がどれほど染みこんでいることだろうか。どれほどの喜びと苦しみ、悲しみ、悔しさ、諸々の人間の感情が込められていることだろうか。



円形闘技場に隣接する形で、半円形の野外劇場跡がある。約1万人を収容することができる大施設である。どれほどの規模の建物であるのかを象徴するごとく、よっきと二本の円柱が立っている。古代ローマの神は太陽神、すなわちギリシャ神話のアポロン。詩・音楽・芸術・予言の神様である。劇場で上演される悲劇などのバックで奏でられる音楽(オーケストラ)とは緊密な関係があったはずだ。アポロンの神に捧げる儀式にふさわしい柱だったのだろうか。頭上高くそび

える柱を子細に眺めていると、精緻な彫刻が施されている。いやそれだけではない。史跡には発掘された大小さまざまな石が、まるで放置してあるように転がり、積まれているが、それらの一つひとつには、やはり彫刻が施されている。ぼくにはそれぞれの彫刻の意味は不明だけれども、ローマ帝国の人々にとっては、どれ一つとして無意味な形象ではなかったはずである。

古代都市は小高い丘に闘技場や劇場を造る。神に捧げる大がかりな儀式だからである。人々が日常生活を営むのは、それより下になる。それを物語るように、アルルの街の下には都市が眠っている。その一つ、17世紀の教会だと案内を受けた建築物に入ると、地下に続く階段がある。階段を下りるとクリポルティク(アーチ型をした生活道路)となっている。道の片方はおそらくさまざまな商店が出されていた空間であろう、その反対側には側溝が掘られている。発掘によってコの字型のアーチ空間を楽しむことができる。クリポルティクのところは、行政、司法、経済、宗教が活発に行われていた。

まだまだアルルの街にはこうした当時を偲ぶ建築物が眠っている。アルルはローマ帝国の都市の上で発展をしてきたことが推測されるのである。はるか古は、すべてが石を切り出し、加工し、さまざまな使用目的にあわせて組み合わせ、築き上げた石文明であった。どれほどのエネルギーと歳月が費やされたことであろう。2000年もの間、これらが形をなして残されている事実は、その一つ一つの石に込められている知恵と技の精緻さ、確かさを教えられる。パリの街づくりでは直下から石を切り出していたが、アルルでの都市づくりでは、石をどこから運んできたのだろうか。これらの白石、具体的には石灰石を、山で切り出す人、船に詰め込む人、降ろす人、そして一つひとつ寸部の狂いもなく積み上げる人等々、想像に絶する人海戦術によってこれら一連の建築作業がなされていたわけであり、それほどに強大な権力と財力とを保有する歴史の一コマを実感した。白い色というのは、あらゆる色彩を吸収し、かつ照り返すものである、という観念を捨

ることができない一時であった。

もちろんこの白石に込められた歴史は、古代に止まらずヨーロッパ近代にまで、脈々と生き続けるのである。

歴史というと、ぼくたちは、どうしても分かりやすい「権力史」を追いかけてしまう。アルルの先史をローマ帝国で見て、「アルルは歴史の宝庫だ」と納得してしまうわけである。しかしながら、権力によって統制され、その変遷のダイナミズムも歴史であると共に、権力とまったく無関係ではないけれども、人々は「自分の歴史」を作り上げている。たとえば、ぼくは日本国民だから日本国の政治や経済・文化の中に生きてはいるけれども、しかし、ぼくという人格丸ごとが「日本国」ではない。習俗というか、時々中央権力とは無関係のところ、モノを考え、モノを作り、コミュニケーションをしていることは確かである。それらを、もちろんぼくという一人格を通してなのではなく、人類の確かな歩みの中に見だし、意味づけていくことこそ、歴史のダイナミズムなのだろうと思う。それらは、一体、どういうところに具体的に見いだすことができるのだろうか。



梶原さんが、街の広場の一角に建っている青銅の人物像を指さし、「瀬田さんがいつぞや古書で求められた、フレデリック・ミストラルの像ですよ。」とご案内下さった。銅像の後ろ側の台座を見ると、「SOVSCRIPCIOVN” PVBLICO”などの文字を見ることができる。VはUの古表現であるのでそれを補ってみると、それぞれフランス語の souscription(応募、出費)、public(公共の)とよく似ている。これはプロヴァンス語で書かれている銅像設立経過の説明文であった。フレデリック・ミストラルはプロヴァンス語の保存・継承に功績があった人物で、ぼくが梶原さんに、「アカデミー・フランセーズで”正しいフランス語”が整えられ、今日の、フランス共和国共通語としてあること

にも、その組織のあり方について非常に興味深いものがありますけれども、フランス国内の多様な言語、たとえば民族語とか地方語とかについても、いずれ機会を見て学んでみたいと思っています。」と、自分の能力を省みず、お話ししたところ、「プロヴァンスにはプロヴァンス語とい

うのがあり、フレデリック・ミストラル がプロヴァンス語とフランス語との対訳の形で、作品を残していますよ。」と、古書フェアの一角から、彼の全集(ŒUVRES DE Frédéric Mistral, 1921, Paris)の二冊を紹介して下さった。ノーベル文学賞を受賞した彼の「生の姿」にほんの少し触れたにしかすぎないけれど、いずれの日にか、自分自身の「頭」で彼の業績をあくなく眺めてみたいという期待をもった。

ぼくが、かなりの程度で、権力から遠く離れた人々の生活や文化にこだわっているのは、ぼく自身の忌まわしい生育史と密接に関わっている。それは教育受難史ともいべきもので、学校内、教室内で、「方言」を使うと、クラスメートや教師から、「それは悪い言葉だから使っちゃいけない」と注意を受け、ひどいときには教師から体罰を受けたことがある。日常生活の中で、親も隣近所のおじさん・おばさん、それと町の店の人も、みんなその地方に伝承されてきた言語、すなわち「方言」(地域語)を使って暮らしている。それを、いったん「学校」というところに入ると、「悪い言葉」として叱責されることが、どうしても腑に落ちなかったわけである。この「共通語は善」「地域語は悪」という教育の論理が何故あるのかについては、その後の人生の中で掴んでいくことになるが、ぼくにとって「地域語」は、非権力の象徴として、民衆の強かな生き方、文化創造能力、生産力を啓示してくれるものとなっている。

フレデリック・ミストラルの努力にも関わらず、プロヴァンス語は次第に姿を消しつつあるとか。ブルターニュ地方に残るブルトン語は、現在、学校で教えられているそうだが、プロヴァンス語はそうではない。小学生から見て祖父母の代がようやく読み書きができ、父母の代がようやく読むことができるという消滅の姿である。ある言語が消滅するということは、その言語に付随する生活・文化・生産のすべてが消滅するということの意味する。我が国のアイヌ語の例を見るまでもないだろう。何とか保存に努め、日常の生活のなかで使用されるまでになってほしいものだ、一介の通行人の分際で、願っている。幸い、プロヴァンス地方の大きな書店ではプロヴァンス語コーナーが設置され、ガイドブック、辞書、そして掘り起こされた文学などの書物が並べられているのだ。……「くどくどと、もう。早く "Finissiés !"」という声が聞こえてきそうである。

旅程的にはやや先走り、翌日のこと。梶原さんの車は農村風景の中を走っていく。ゴールドという、南フランスでよく見られる、教会を中心とした石造りの集落に入る。「ここは石の街とされています。」という梶原さんのご案内にも、内心では、「南フランスは、いたるところ、石で作られた集落だから、どうしてここだけ、取り立てて石の街というのか」とやや訝った。よくよく見ると石で積み上げた塀が、他所とは異なっている。平らな石を幾重にも横積みをした上に、やはり平らな石をやや斜め立てにして並列してある。まるで防御柵のような感である。

再び車に揺られていくと、道沿いに先ほどのような石塀がずらりと続く。そればかりではない。蟻塚のような石の建築物が散見できるのだ。一体これは何なのだろう。

案内所のドアを開けて外に出ると、都市や山頂に築かれている石材建築物とはまったく異なる石造りの集落が目に入った。イヌイットの氷の集落と形がよく似ているので、はじめは北方文



化圏の民族がこの地まで降りてきたのかと思っていたが、違っていた。それは「ゴール人の小屋」と呼ばれ、コルシカ島の南半分、ペルーなどに見られるのと、同文化形態だそうである。遊牧民の住居、生産・労働の場である。平らな石を大小積み上げ、いっさい漆喰で固めることなく、風雨をしのぐことのできるその精緻な技術は、アルルの古代都市の石文化技術とはまた異なっている。石は、住居材に



なるばかりではなく、モノを生産する道具ともなる。オリーブ油を絞り、壺に流し込むための石盤。絞られた油が彫り込まれた溝へと流れ、それが一つに集まって壺に流されていく。素朴ではあるがじつに計算された道具である。パンを焼く竈(オープン)、羊小屋、ワインの貯蔵室など、それぞれの目的にあった造りとなっている。

ここル・ヴィラージュ・デ・ポリエは1969年から1976年にかけて復元されたとのことである。確かなことは不明であるけれども、紀元後、数世紀かけて、この地方に住んでいたリギューール人が起源であると言われている。この地方でとれる石材を使って「ゴール人の小屋」を建てる建築法は前世紀までつづけられていた。平たい石は、おそらく、岩盤のできている層(石の層)に沿って剥がれてできたものであろう。多少の加工はするけれども、ほぼ自然のものをそのままに活用する知恵は、今のぼくたちには、すでに喪失してしまっている。もったいないという言葉を何度繰り返しても、帰ってこない知恵である。

自然から与えられたものを活用する知恵と技は、人工的な都市文明とは対極にある。続いて、まさにその自然、南仏を作り上げてきた「色彩の起源」を、梶原さんにご案内いただいた。

山も農地も、岩も砂も、赤い。鉄分や鉛の含有量の差によって、その赤は、赤銅色になったり、黄色になったりである。自然顔料として、



あるいは民家の壁の材料として使われてきた。

現在では、化粧品は科学製法によって作られ消費されているし、家屋の壁、漆喰の類も白さを好む傾向があり、南仏を作り上げてきたこの赤土は、以前に比べて、掘り出され、消費されることは少なくなったようである。自然に真っ直ぐ向き合ってきた非権力の知恵と技は、人工化される都市文明に吸収され、消滅されつつある。そんな感慨に耽りながら、深くえぐり取られた赤い山の谷間を歩いていたら、親子連れの、小学校低学年と思われる女の子が、小麦粉のように細かい砂粒に覆われた地面から、両手のひらに砂をすくい上げ、ごしごしと顔に塗り始めた。親から顔料のもとだと教わったのだろう。不器用な形で頬紅が彼女の顔を飾り立てた。弟が、ごろりと横になり、そのままゴロゴロと地面を転がった。やがて姉もゴロゴロ…。衣服は顔料で「汚れ」はしたけれど、きっと、親は、洗濯にかかるいつも以上の手間を嘆きはしないことだろう。「私たちも、子どもの頃はそうやって、遊んだものよ。」



南仏、プロヴァンス地方の歴史の中に込められたさまざまな色彩は、ぼくの感傷・センチメンタリズムとは関わりなく、多くの人々の心を描いたことだろう。

今回の旅に同行した若き教育学徒である瓦林亜希子君は思春期の頃より、ゴッホの人生に惹かれ、求め続けてきたそうだ。ゴッホが心の病を得て、癒すためにアルル精神病院に入る。そして猛烈な創造活動を行っている。彼が

この時に掴んだ色は黄色。ぼくのこの旅の出発を飾ってくれたミモザの黄色ではなく、ヒマワリのそれ。近郊一面にヒマワリの花が咲く夏の季節は、燃えたぎる心の象徴なのだろうか。ぼくは、南仏の色彩は、やはり働く人々の色だと思い続ける。ぼくたちが現代社会の中でとっくに失ってしまった色彩だが、南仏には、様々な形で残されている。

一日目の夜、静かな山里のホテルにご案内いただき、とびっきり上等の部屋を独占させていただいた。室内の灯りをすべて消し、風呂場の天窓から星を眺めた。子どもの頃、天体地図を持って、夢中になって天体で遊んだことを思い出した。観測などというものではない。さまざまな神話・伝説に語られる星座を、ぼくなりにも再追想し、ぼくなりのストーリーを作った。それからすでに半世紀近く、いつの間にか、感性が摩耗してしまい、とびっきり贅沢な一時をいただいたのに、何らストーリーが思い浮かんでこなかった。老いていくということはこういうことなのか。せめて、ぼくの中にある色彩感覚だけは失いたくないものだと考え、早朝の色を見つめようと決意し、ベッドに潜った。

あわててベッドから飛び起き、窓を思い切り開け、ベランダに立つ。朝日が山の稜線の上に昇っている。しかし、すでに、太陽を背中に受け、働く人がいた。赤い屋根瓦の上にはペチカの煙突の影が伸びていた。まばゆく輝く南仏の色は、失せてはいないのだ。

